

氏 名 (本 籍)	あげ いし み か こ 上 石 実加子 (北 海 道)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 3024 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	文芸・言語研究科
学 位 論 文 題 目	ラドヤード・キプリングと十九世紀後半欧米の混淆的文化表象
主 査	筑波大学教授 博士 (文学) 荒 木 正 純
副 査	筑波大学教授 井 上 修 一
副 査	筑波大学助教授 博士 (文学) 宮 本 陽一郎
副 査	筑波大学講師 吉 原 ゆかり
副 査	慶応義塾大学教授 P h . D . 武 藤 浩 史

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、19 世紀のアングロ・インディアン作家ラドヤード・キプリングの短篇小説を考察の中心にすえ、伝統的な作品論と作家論研究をふまえつつ、ポスト構造主義のテキスト論、ポストコロニアル批評理論、さらにはカルチュラル・スタディーズの理論枠を用いて、キプリングのテキストを再読し、それが表象していると考えられる同時代の文化の一端を解明しようとするものである。構成は、以下の通り。

序章

第 1 部 テキストの越境性からみる〈混淆〉の文化表象

第 1 章 「ベルトランとビミ」にみる越境の詩学

第 2 章 〈ベルトラン〉という文化的表象：教養層文化と民衆文化の双方向的な形象の伝達

第 3 章 “Hans Breitmann” をめぐる文学性と歴史性：キプリングとチャールズ・ゴドフリー・リーランド

第 4 章 「ペンシルヴェニア・ダッチ」をめぐる地政学：移民／言語／共同体、その虚構的記号性の変遷

第 2 部 キプリング〈文学〉と創出される「中間」領域

第 5 章 インターリンガルな言語実践：混淆と閉塞のキプリング〈方言〉学

第 6 章 19 世紀的〈神智学〉と心霊主義：キプリングとマダム・ブラヴァツキー

第 7 章 帝国の権力と無力化した文化：コロニアル・エンカウンターにみる恐怖と欲望の機構

第 8 章 光学的眩惑をかたどる物語世界：肉眼でみる／心の眼でみる／夢をみる

結章／引用参考文献／図版一覧／初出一覧

序章では、1907 年にイギリス最初のノーベル章作家となったキプリングが、その後、またたくまに忘却に近い扱いを受けることになり、1980 年代にエドワード・サイードをはじめとしたポストコロニアル批評家によって、帝国主義との共犯関係から糾弾され再度注目されはじめた経緯を語り、本論文の問題設定と目的と構成について述べている。

第 1 部第 1 章では、キプリングの文学作品は、雑誌メディアに掲載されたあと本にまとめられることが多いが、雑誌に掲載されることのなかった小品「ベルトランとビミ」(1889) 年をとりあげ、テキストの地理的・種族的・言語的越境性について指摘している。

第2章では、第1章の分析・考察を踏まえ、登場人物名「ベルトラン」の記号性を問題化し、この名にからむ文化について論じている。

第3章では、同じ作品に登場する語り手「ハンス・ブライトマン」の記号性を問題化し、この名から、その名を生みだしたキプリングとほぼ同時代のアメリカのヒューモリスト、チャールズ・ゴドフリー・リーランドにいきつき、彼と彼にまつわる文化性、具体的には、リーランドの代表作「ハンス・ブライトマン」バラッドのブーム、方言詩と大衆性、ドイツ系アメリカ人、グリムの法則と比較言語学、ジプシー学と魔術研究などについて考察している。

第4章では、第3章で論じたリーランドをとりまく文化性のうち、そのバラッドが書かれた言語「ペンシルヴェニア・ダッチ」をめぐる文化について考察している。

第2部の第5章では、第1章で考察したドイツ語と英語という言語的越境性の問題をうけ、キプリングの全般的な言語行為、つまり、英語を基盤としつつ他の言語、たとえばウルドゥー語や英語方言を混淆する言語実践をめぐる問題について論じ、彼の言語実践は、二言語使用の実践のうえにあるのではなく、二言語の中間からしか浮かびあがることはないとしている。

第6章から第8章にかけては、第5章で指摘した「中間性」を問題化し、キプリングの「インドもの」と呼ばれるもので、とくに魔術を扱った短編を分析対象としている。第6章では、「魔術」＝「インド」と単純に結びつける視点に疑問をなげかけ、当時、欧米を席卷した神智学や心靈主義などの運動が、実は、アメリカからインドを経由しイギリスにわたった移動の思想であったことを明らかにし、キプリングの描く魔術が、インドの象徴として機能しているようで、実は、そこにイギリスのありようを描きだしていることを指摘し、マダム・ブラヴァツキーをめぐるインドの神智学運動と、その後のイギリスへの移入の経緯をたどっている。

第7章では、魔術を扱った別の短編を対象にし、そこにコロニアル・エンカウンターの物語を読んでいる。具体的には、非西欧人がおこなう魔術が、西欧のメスメリズムなどの治療行為の伝統にあるものに符合していることを読みとっている。

第8章では、キプリングの中期の短編で、現実世界と非現実世界の＜越境性＞が描かれた作品群を対象とし、そこに当時最新であったテクノロジーが組み込まれていると指摘し、キプリングのテクノロジーへの関心と超自然を扱った物語の組み合わせは、科学が魔術であるかのように受容された西欧の文化を表象していることを論じている。

結章では、ここまでの考察を概括的にまとめ、成果と今後の研究の展望を述べている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

従来、キプリング研究は、本論文が指摘しているように、決して活況を呈したのではなく、他の同時代作家、たとえばトーマス・ハーディやオスカー・ワイルド、さらにはW.B. イェイツなどと比較すると貧弱なものであるといわざるをえない。しかし、ポストコロニアル批評のなかで、キプリングのテキストは、大英帝国の帝国主義に加担するものと読まれ注目されだし、別の立場からの本格的な研究書もわずかであるがではじめてきた。このような状況のなかで、本論文は、日本はいうに及ばず英米においても、本格的で先端的なすぐれた研究論文であるといえる。

本論文のすぐれた特色は、単にキプリングのテキストを読み、文化的コンテクストに結びつけるという古いタイプの研究にはなっていないことである。しっかりとした問題意識にもとづき、明確な問題設定をし、テキストの綿密な読みだけでなく、そこから生じてきた文化的な問題を適確に把握し、帝国主義作家・キプリングではない、もうひとりのキプリングを当時の文化状況との関係から描きだし、また、キプリングと同様に文化史の深層に沈潜していた事象を明るみにだして、19世紀後半の西欧文化を鮮烈に描写したことにある。

本論文の第2部も、従来の研究にない指摘をしたすぐれたものとなっているが、それにもまして特筆すべき本論文の学問的業績は、チャールズ・ゴドフリー・リーランドを忘却の淵から蘇らせた点にある。リーランドは、英語とドイツ語の混成言語（ペンシルヴェニア・ダッチであると誤解されてきた）でテキストを生成することによって、欧米で一大ブームを巻き起こした作家であり、ジプシー研究や魔術研究にまで知的領域をひろげていたが、そのためにキプリングと同じ運命をたどった。正統的なアメリカ文学史には、その姿すらみられず、また、現在のアメリカ文学研究者もまったくその存在すら知らないありさまである。なぜそうなったか、本論文は、キプリングの運命と同様に、その経過をも明らかにしている。それは、文化の＜純粋性＞＜独自性＞、また自らの＜普遍性＞までも追求した文化が疎外していった、文化の＜混淆性＞をみごとに体现している文化を具体化しているからであるという。つまり、＜時間・空間＞にきわめて忠実にしたがったテキスト、ないし文化であった。だからこそ＜普遍性＞の追求をやめ、＜時間・空間＞にとらわれた＜特殊性＞を求める文学研究の粹、つまりポストコロニアル批評理論とカルチュラル・スタディーズとの確立によって、はじめてその特殊性を＜表象＞したすぐれたテキストであるとみることが可能になった。本論文は、これを自覚的におこなった画期的な論文である。

とはいえ、本論文に欠点がないわけではない。明確な問題意識にもとづいた問題設定をし、キプリングのきわめて特殊なテキストを分析対象にしたことは当然のことであり、また賢明で妥当な方途でもあった。だが、それにしても、膨大なテキストを生産したキプリングであれば、もっと多くのひとびとが親しんだカノンのテキストを対象とすれば、本論文が導き出した結論とは異なったキプリング像と同時代像とが浮かびあがった可能性もある。かりにそうした作業の結果、本論文と同様の結論がでたとしても、そうしたテキストと照らし合わせ検証する作業は必要であったと思える。さらに、近年、発展目覚ましいジェンダー研究の観点から、分析されることはなかった。しかし、このことによって、本論文の価値が下がることはなく、そうしたことは著者の今後の課題であり、また本論文に触発される他の研究者の課題でもあろう。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。